

「新生」(第一ペトロ 一・三〜九)

1 キリストの復活とわれらの新生

今日、イースターの後の最初の日曜日、この日私どもが何よりはつきり思い起こさなければならぬのは、キリストの甦りとはひとりキリストの甦りだけにとどまらぬということ、すなわちキリストの甦りとは死人の甦り、の初穂であって、したがってそこには私ども人間の甦りが含まれており、そこに、私ども人間の新しい人生の始まりがあるということです。

この二つのこと、くり返せば、私ども人間の甦りがキリストの甦りに含まれているということ、そこに私ども人間の新しい人生の始まりがあるということ、これらが私どもの知らなければならぬ二つの真理です。このうちとくに今日は、二つ目のこと、イエス・キリストの甦りによって私どもに新しい命の道が開かれた、新しい人生のあり方が明らかにされたということを学ぶこととなります。

はじめに関連する一つの聖書箇所を挙げます。どうぞそのままお聞きください。ローマの信徒への手紙六章四節です、「私たちは洗バプテスマ礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、私たちも新しい命に生きるためなのです」。少し込み入った言い方ですが、私どもの受けた、あるいは受ける洗礼が、イエス・キリストの死と復活にあずかる始まりであること、したがって新しい人生の始まりとなるということが語られています。

洗礼を表すドイツ語の単語はタウフェと言います。これは英語のデュープ、つまり深いという言葉と関係のある言葉です。私どもは水に深く沈められます。キリストとともに、私どもも死ぬのです。しかしその深い水の中から、死の淵から私どもは引き上げられます。そしてキリストの甦りとともに新しい命に生かされるのです。そのようにして洗礼と共に私どもの新しい生は始まっているのです。つまり私どもは洗礼によってキリストの死にあずかるだけではありません。キリストの甦りと甦りの命、新しい命にあずかるのです。こうしてイエス・キリストの復活は、私どもの洗礼を通して、私どもの自身の新しい命の始まりとなります。キリストの甦りは私どもの、私どもすべての者の新しい生の始まりとなるのです。私どもの新しい生はすでにそこにすべての人のために用意されているのです。

逆の言い方をすれば、私どもがキリストの甦りを私どもの甦り、新しい命の始まりとしても受けとめないならば、イエス・キリストの甦りを本当に信じた、本当に理解したことはないということです。

新しい生、新しく生れる、約めて言えば新生、それはキリスト者とはどのような存

在かを聖書が語るさいの比喩の一つと違ってよいでしょう。重要なことは、新生とはじつにキリストが甦ってくださったことに基づいているということです。たんに私どもが、しばしばそうするように、そしてしばしば挫折するように、心機一転、ある決心のもとに何ごとかを新しくやり始める、前よりもましな生き方をする、ベターなことを心がけるといふようなことではありません。新生がキリストの甦りに基づくとすれば、罪に汚れた古い自分をさっさと脱ぎ捨て、死に勝利した生を、したがって別な生をキリスト共に私どもが生き始めるということです。つねに神と共なる新しい現実を歩みはじめるということです。

2 生ける望み

さてそこで改めて今日の箇所、三、四節に目をとめたいと思います。

わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように。神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、またあなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しばまない財産を受け継ぐものとしてくださいました。あなたがたは、終わりの時にあらわされるように、準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています。

新しく生まれる、新生という言葉が、聖書でキリスト者を表す重要な言葉だということは今申し上げた通りです。

赤ん坊は自分で生まれてくるわけではありません。キリスト者が生まれるということも同じです。キリスト者の誕生は、神によって新しく生み出されるのです。本人の心がけとか、熱心というものでそのようになるではありません。この箇所がその秘密を語っています。「神は豊かな憐れみにより」。憐れみによつてです。憐れみとしか言いようのない恵みの導きが私どもに注がれました。先週の聖書箇所でパウロが書いていたことを思い起こしてもよいと思います。「わたしは、神の協会を迫害したのですから、使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です。神の恵みによつて今日のわたしがあるのです」（第一コリント一五・九）。キリスト者として新しく生まれたのはこの憐れみによるのです。いまや私どもの新しい生の土台はこの神の憐れみです。

ところで今日の聖書は、このように神の憐れみによる新生を経験し歩み始めたキリスト者の生の特色を、とりわけ希望をもつて生きることとして描いています。信仰だけがキリスト者の新生を特徴づけるものではありません。愛だけが新生した者に求められているのではありません。信仰と愛とともに希望もキリスト者に固有のものです。

希望とは、ここにないものによって生きること、生かされるということです。すべてのものがすでに手元にある、願いが叶えられているなら、そもそも希望するということは起こりません。来年もまた会えるとなれば、この一年は、その希望が私ども生きる力です。しかし一年で結果が分かるとすれば、私どもが希望に生きることはそれほど難しくもない。私どもの人生は、本当に最後のところ、今はそうでなくても、つじつまが合うのだろうか、納得できることになるのであろうか、希望していてよいのだろうか、そうした思いが私どもの胸を行き来します。簡単に言えば、キリスト教の希望とほかの希望はどこが違うのだろうかということですが、そしてその答えもまたイエス・キリストの復活にあるのです。復活とは世の終わりに起こることの先取りです。つまりキリストの復活において私どもは死のその先を、最後の希望を、この目でこの世で見るのが許されるのです。私どもの救いが準備されていることを、このキリストに復活において私どもは確信してよいのです。ですからキリスト教の希望は空しい希望ではなく確かな希望です。新しい生を生きることとはこの確かさを生きることです。昔、今から百五十年ぐらい前です、ドイツ南部のシュトゥットガルト近くの村で活躍した牧師にブルームハルトという人がいました。この人はキリストが再び来られることに強い希望をもっていた人で、自宅の庭に、つねに馬車を用意していたそうです。キリストが来られたとき、この馬車を駆って、いち早く迎えに行くというわけです。希望の確かさはこうしたいわば真面目なユーモアをも生み出します。こうした希望に生きることが新しく生まれた人間の生き方になります。

3 希望の忍耐

このような私どもの信仰も希望も、しかし、この世の中にあって、じっさいどんなに多くの試みに出会わざるをえないことでしょうか。

6節と7節をもう一度読みます、

今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれませんが、あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりはるかに尊とく、イエス・キリストが現れるときには、賞賛と光栄と誉れとをもたらすのです。

なるほど私どもの信仰生活は（五節の終わりにあるように）「神の力により、信仰によって守られています」。それは確かなことです。この「守られています」という言葉は本来軍事用語の相当強い言葉です。そのように神によって私どもは守られ、それゆえ心から喜んでいる一方で「今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならない」のも事実なのです。この「試練」という言葉も、「守る」が軍事用語であるのと

同じくとローマ帝国アジア州におけるキリスト教迫害を指し示しているといわれています。それはともかく私どもの信仰生活がそのようなさまじまの、しかも強烈な試練に満ちていること、そしてそれらが現実的なものであるということを決して否定できないのです。

もとより私どもの肉体は弱い。病み、衰え、気力も失われがちです。それ以上に私どもの心は傷つきやすく、もろい。それ自身もろい心は、しかし反対に人を傷つけ少しも意に介さないような悪魔性もときには帯びています。人と人との関係は破れたまま、私どもは悩み、うめき、あきらめ、うつくつした思いは今日いたるところに、若者の間にも、年老いた者の間にも渦巻いています。それらはみな私どもの神信仰を攻撃し否定し、教会生活をあざわらい、つまずかせる、まさに信仰の試練が私どもを襲います。

いかなるものであっても試練それ自体決して良いものではありません。「われらを試みに合わせず、悪より救いだしたまえ」というのは、いよいよもって切実な私どもの祈りです。すべてが神のご支配の中にあるなら、神が私どもの味方であるなら神は決して私どもへの悪の攻撃をお許しになるはずはないからです。にもかかわらず現実には私どもに試練が襲います。しかしそのとき私どもはそこには何か神の思いが隠されていなか問うてよいのではないのでしょうか。私どもの遭遇する困難は私どもの信仰を試し、鍛え、本物にしていくのだということなのです。はじめは決して快いものではない、しかしそのことによってやがて私どもの信仰と従順はいっそう輝きを増して、不純物が取り除かれ、純化されるといふことはあるのですから。それこそが「今しばらくの間」の私どものキリスト者の信仰と生活の意味です。

預言者イザヤは、ドマについての託宣として、次のようなよく知られたやりとりを記しています、「セイルから、わたしを呼ぶ者がある、『見張りの者よ、今は夜の何どきか、見張りの者よ、夜の何時か。見張りの者は言った、夜明けは近づいている、しかしまだ夜なのだ・・・』」（二一章一節）。今日の聖書を記したペトロも、今は夜の何時かと問われたこの見張りのように、困難な迫害下にあっておそらく、その見える現実に目を止めるかぎり、きつと、しかしまだ夜なのだ、答えるほかなかったことだろうと思います。にもかかわらず彼も、この預言者とともに、夜明けは近づいていると、ペトロの言葉でいえば「あなたがたは、終わりの時にあらわされるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています」、それだけは確実に語ることができました。私どもにおいても事情はいつもそのようなものです。私どもも夜の何時かと問われます。私は答えることはできません。しかしこれだけは、見えない現実だけでも、夜明けは近づいているということだけは、みな確信をもって答えることができる、そしてそのように答えて、私どもは歩みつづけ

たいものです。

(二〇一八年四月八日)